



圓銀支出交換之起見





過般圓銀ヲ以テ墨銀ト平行流通セシムルノ御布告

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

以上ハ此兩種ノ銀貨上ニ飽マテ差違ヲ生セサル
様永遠維持ノ法方ヲ御設置相成候儀ハ喋々スル迄
モ無之然ル片ハ從前ト違ヒ此兩種ヲ本港ニ於テ轉輾
交換セシムルモ茲ニ於テ容易ナラシカト推考仕候故ニ差向
陋見ノ有ル處ヲ概陳シ竊カニ高断ヲ仰上候

第一說 香港北京等ハ銀圓受授ニ容易ナルヲ論ス

一香港ハ品位稍衰之香港銀ヲ以テ我カ銀圓ヲ必適視スル
カ以テ之ヲ該港流通之本貨ト認可スルモ本港ニ較フル

察勿ナラシ北京ノ如キハ墨銀ヲ支用スルニモ其慣習アリテ
小貨ナケレハ半元ハ全圓ノモノヲ中斷シ二十五錢ハ是レヲ
四分シテ其量目ヲ平克シ其短欠ヲ補足スルハ市民ノ
慣手ニシテ圓墨出處甲乙ヲ論セサルハ蓋シ支用之有
限アルヲ以テ也故ニ其流用モ本地ト較フルニ捷運ナリトス

第二説 上海支用ノ難点ト迅速支出交換ヲ緊要トスル
ヲ論ス

一上海ハ尚未タ授受ニ便ナラス偶ニ支出ヲ試ルモ上海銀負
七十二兩以内ヲ以テ百圓ト見做スカ如ク必ス先ツ之レヲ改

鑄シ銀塊トスルノ起算ヲ云テ尚ホ圓墨ニ甲乙ヲ論スル今日
ニ於テ免カレス之レヲ天然ニ放托シ其時運ヲ俟ツモ茲ニ交
換ノ法略ヲ用ヒサレハ何日カ之レカ通行ヲ期セン遂ニ外人ヲ
シテ却テ清貨自鑄ノ論柄ヲ滋生シ平日口頭ニ我カ圓銀
ヲ擯斥セシムル事項ト成リ無涯ノ不弁ヲ兩國間ノ貿易
ニ波及スルハ蓋シ無主ノ富家ヲ外人カ覬覦スルニ異ナラス

第三説 本國商家毎月之收額ヲ概論ス

早ヤ此際ニ到テハ迅速支出交換セシムルヲ切望スル處ニシテ
竊ノニ思惟スル處アルハ本港出店ノ三業又如キハ月收墨銀約

二千六百元餘但シ時々船舶修理等ノ支アルヲ以テ之レヲ
二萬元ト見做シ廣業洋行約上海銀二萬兩餘三井物
産會社約壹萬兩ト見ル故ニ毎月五六萬元ノ墨銀ハ内國
還送ノ銀負トシテ存存シ為換ノ良機ヲ俟ツモノコトシ

第四說 領事館並ニ日本各店ヨリ洋銀ヲ以テ支出スル

毎月之銀項ヲ概論ス

一本港大市ノ賣買ハ總テ上海銀兩ヲ以テス則チ九八銀ト通
稱スルモノニシテ平素商家カ受授ニ用ユルモノハ内外銀行ノ所
謂テール銀票アル而已而シテ此銀票ハ五兩以下ノモノヲ存存セス

又タ雜貨零賣ニ用ユルモノハ總テ正銀墨貨ヲ以テス之レニ準
シ我カ商貨モ總テテール銀票引換ニ賣却スルハ高買(但シ
三菱支社カ運賃ハ墨銀ヲ以テスルハ此外ナリ)手内ニ貯存スル
モノハ則チ上海銀兩而已而シテ今ニ在港之我カ官商ヨリ
墨銀ヲ以テ支出スルモノヲ概算スルニ約ソ八千元トス

第五說 圓銀廻送ノ豫數ヲ論ス

今ニ領事館並ニ各店ノ月支タル墨銀ヲ豫算シテ月首ニ
之レヲ圓銀ト交換シ置キ戸々ヨリ其圓銀ヲ以テ清高ハ支
給シ而シテ三井或ハ廣業兩店ヲ以テ換ノ便區ト定メ若シ

墨銀ヲ要求セハ此兩店ニ到リ之換セシムルノ捷便ヲ與
フベシ若シ如此シテ僅カニ半年ヲ經由セハ圓銀ヲ信據レ數
千ノ銀額ト雖モ領收スルニ到ラン歟而シテ如斯スル莫尚久シ
ケレハ竟ニハ交換ヲ要セス墨銀ト混合受授スルハ論ヲ俟タス
此時ニ當テ一面ニテハ海關ニ請求シテ税金ノ收額ニ公認
セシムルハ蓋シ容易ニシテ多言ヲ用ユルニ及ハザルベシ

第六說 兩國產貨ノ多ク論ス

本港各店ニ貯有スル處ノ金貨ハ賣貨ノ代金ニシテ必ス之
ヲ本國へ送還スル歟或ハ清貨ヲ購入シテ來往ノ活用ヲ為
スニ止ム然レモ彼此ノ貿易ハ我邦ヨリ賣貨高スルモノ多クシテ
清貨購買ハ僅カニ十カニ二三位ル而已

但シ此項ハ特ニ上海市情ノ賣買ヲ指示ス南港ニ於ル

砂糖ノ如キハ是レト同視セス

第七說 為換之差金ヲ論ス

茲ニ於テ其剩餘ノ金貨ハ百元ニ付一二元ノ為換費ヲ出シ
送還ノ道ヲ覓ルヲ常トス然レモ上海ノ如キハ東洋ノ冠市
タレハ多數ノ洋貨ヲ棧貯シ横濱ノ景況ヲ視察シテ大ニ
賣售ス其賣價如キモノハ之レヲ横濱ヨリ本地へ送

此ノキ收額トス若シ如此機會際セ、為換費金ヲ要求セザ
ルモ同位同數ノ金負テ橫濱ニ於テ得ル莫アリ然レモ如此良
好機會ハ稀有ニシテ十カ八九ハ損止トス

第八說 三菱送金ノ莫ヲ論ス

一三菱社ヲ以テ言フモ水脚銀ハ我社ノ船舶ニ裝運シテ其
運費ヲ省クト雖モ之レニ保驗ヲ附スルト裝工卸下ノ雜費ハ
尚ホ支出セサルベカラス

第九說 三菱為換ヲ論ス

故ニ此交換之開手ヲ為スニ圓銀十五萬元ヲ本館へ預備ス

ルモノトシ内壹萬圓ハ正銀送致ノ分トス而シテ本港ニ在ル三
菱會社カ收入スル處ノ墨銀ハ結ル處毎便本邦ニ送還スル
之レヲ簡易ニ當館へ受領シテ其收票ヲ給付スベシ而シテ東
京三菱本社ハ此收票ヲ國債局へ轉交シ其價數正圓
銀ヲ收受スベシ夫レ如此スル莫都台十四萬圓ニ到テ上海
ノ領事館ハ此内十三萬圓ヲ本港ノ和利シタ止銀行へ交付シ
有期預金ノ利子 五分或ハテ加ヘシムベシ
六分也

但シ此利子ヲ年六分トスルキハ則チ七千八百元ヲ收入ス此

金員ノ支出ハ第七章ヲ照考スベシ

一、右項ニ記スル壹萬圓ト墨銀壹萬元トヲ本館ニ預備
シ置キ第四第五說ニ記載スルモノニ照合シテ支出交換ノ着
手ヲ為スベシ

第十說 交換所月費ヲ論ス

一、此事務ヲ弁理スルニ左開ノ月費ヲ要スベシ

總轄人 一月月給 洋銀五十元

書記一名 全 全二十元

金見一名 全 全二十元

僱人二名 全 全十二元 但シ一名六元宛

第十一說 至大難事ヲ論ス

抑モ此交換所ヲ必行スルニ當リ一難事アリ則チ人此銀
圓ヲ甲店ヨリ請取リ乙店ノ交換所ニ到ル間ニ萬一贋圓
ト引換来リ墨銀ト交換ヲ要求スル片ハ其判然廢物タルヲ
明知シ未者彌々疑シキモノアレハ地方官憲ニ訴出シテ其究
問ヲ請フト雖モ萬一其由来ノ判然セサルモノト第九說ノ月
費トハ之レヲ第八說ニ記載スル利子ノ内ヨリ償却スベシ

第十二說 銀塊ヲ改鑄シ清國ニ再運シテ向日ノ勝算ヲ

論ス

一、前項第三説ニ陳述スルモ、各店收額ハ皆上海九八銀
トス而シテ清人今ヨリ圓銀ヲ信據シ大ニ之レヲ流通スル
ニ到ラハ各人皆我銀圓ヲ載運スベシ而シテ此期ニ到ラハ別
ニ策ヲ設ケ各店ニ貯有スル處ノ上海銀ヲ以テ其銀塊
ヲ購買シ續々改鑄再運スベシ是レ素ヨリ唯々日清兩國
ノ為而已ナラス歐米各國ノ高賈ニ於テモ貿易ノ便易
ヲ得ルト我邦ニテハ金銀貸借ノ融通ヲ其兩國ニ占有ス
ベシ如斯モノハ向日我レニ勝算アリテ不可言ノ裨益ヲナス
モノトス

第十三説 小貨銀圓ヲ論ス

竊カニ回顧スルモ、明治十年ノ頃我カ小貨幣ハ本港ニ
運入シ漸々流通ヲ試ム頗ル要求ノ數ヲ増シ小貨一百
圓ニ却テ墨銀一百二元ヲ以テ交換スルノ勢カ、各
人ノ知ル處ニシテ其源因ハ當時我カ人力車ヲ清地ニ引
用シ市内ノ各人ハ之レニ小貨ヲ支給スルニ頗ル便易ヲ覺
ヘ且ツ上海寧波ノ航行ニ時ニ競争船ヲ始メ破數ノ船費
ニ之レヲ支出セシ良好機會ヲ得タレハナリ但シ新貨觀看
莫良ナルト圓面ニ飛龍ノ形兆アルヲ喜ヒ婦女子ハ之レヲ鈕

子ニ用ヒシ等ノハ素ヨリ僅々限アリ、雖モ亦タ之レカ源
因ラ推知スルニ足レリ時、清商ハ數十萬圓ヲ裝運シ市
場ノ賣價高比ミトシテ相止マス、竟ニ衰微ヲ茲ニ顯ハシ方今
ノ大差既ニ壹割五アノ跌落ヲ来タセリ、然レ氏今若シ先
キニ此本貨流用ノ自由ヲ得續ヒテ挽回ノ法ニ漸着セハ
更ニ又タ膏味ヲ得ルモノアルカ如トシ

